



エクイターナ・オーストラリア 観戦記

南半球最大の馬の博覧会
EQUITANA AUSTRALIA

2016年11月17～20日、オーストラリア・メルボルンのショーグランドで、「エクイターナ・オーストラリア」が行なわれた。エクイターナは南半球最大の馬の博覧会で、初開催は1999年、メルボルンで行なわれた「エクイターナ・アジアパシフィック」。

その後はブリスベンで1回、シドニーで2回と会場を移してきたが、以降はメルボルンに里帰り。

2016年で第12回目を迎えるこの博覧会は、今や世界レベルの馬の祭典として注目を集め、

多くの馬・乗馬ファンやプロ、馬関係の業者のみならず、子連れの家族やカップルなどが詰めかける。

かくゆう私も新たな発見を求めて、2年ぶりとなるメルボルンへ出かけた。

文・写真=田中雅文

エクイターナ・オーストラリアの魅力

オーストラリアの11月は春。花が咲き乱れ、一番美しく輝く季節だ。

会場のショーグランドは市の中心部から車や電車で約30分、競馬のメルボルンカップで有名な「フレミントン競馬場」のすぐ近くにある。

エクイターナ開催期間中は5万もの人々が訪れるといい、メルボルンのホテルはどこも満杯。会場内はもちろん、街を歩いていると旧知の馬関係者に会うこともしばしばである。

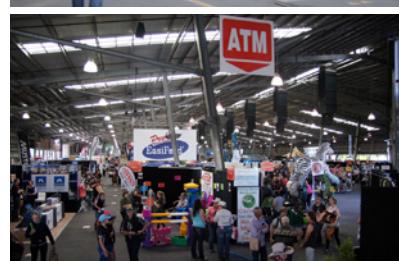
この間、市電は無料で乗り放題となる。ありがたいことだ。

ヨーロッパでも、さまざまなホースショーが行なわれている。

本家・ドイツのエクイターナ、英国のオリンピアホースショー、フランスのサロン・ド・ショバールなど、皆それぞれに素晴らしい、ヨーロッパの馬文化の広さと奥深さを感じさせてくれる。

しかし、何度かエクイターナ・オーストラリアに通ううちに、ヨーロッパのホースショーにはない独特の魅力を感じるようになった。それは何か。

ひとつは、ヨーロッパのホースショーの多くが冬季、屋内で行なわれるのに対し、エクイターナ・オーストラリアは春に開催。しかも屋外アリーナでのイベントがたくさんあるため、オーストラリアの春の空気や輝



上：9:00の開門前には、入場を待つ長蛇の列ができた。中：期間中トランは無料で乗れる。下：広大なパビリオンには300以上の展示ブースが並ぶ。

Equitana Australia 2016 DATA

- ・展示総数：322
- ・参加頭数：450頭
- ・競技者数：400人超
- ・競技種目数：18種目 21競技
- ・賞金総額：15万豪ドル（約1200万円）
- ・馬の品種別展示団体数：23団体
- ・教育セッションの講演者数：60人
- ・教育セッション数：175
- ・運営ボランティア：210人

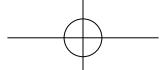
く太陽を満喫する楽しさがある。

ふたつ目は、イベントの内容に主催者の主張が感じられること。オーストラリア独自の馬のスポーツも多く、大変興味深い。

近年の目玉企画は、「新馬調教コンテスト（The Way of the Horse／TWOH）」で、5000人収容のインドアアリーナが連日、ほぼ満員だった。

今年の新企画で人気を集めたのが、オーストラリアの野生馬・ブランビーを使った「オーストラリアン・ブランビー・チャレンジ（Australian Brumby Challenge）」。

このほか大変興味深い企画や展示がいくつもあったが、ここでは残念ながら書き切れない。いくつかをピックアップして、次ページからレポートしていこう。



エクイターナー一番の人気イベント!

新馬調教コンテスト (Horse starting competition)

THE WAY OF THE HORSE (TWOOTH)

選ばれた3人のトレーナーが 新馬の調教技術を競う

TWOOTHは、今やエクイターナ・オーストラリアの一番の人気イベント。全豪から名乗りを上げた数多くのトレーナーの中から3人が選ばれ、新馬調教の技術を競う。

新馬調教の流れは次の通り。

まず、初日の木曜日に、各トレーナーが馬を選ぶところからスタート。3つ並んだラウンドペンの中にそれぞれが選んだ新馬を入れ、最終日の日曜まで毎日1時間半、調教する。最終日にラウンドペンを取り払い、アリーナのグランド一杯に障害物を並べて馬を通過させる、というものだ。

若い新馬の馴致は、古くからの“強制調教”ではなく、馬の本質を理解し、やさしい方法で行なうのもポイント。そして調教された馬は人を信頼するため扱いやすい馬となり、ハッピーな生涯を送れる、といった考えに基づいている。

審査対象となるのは、トレーナーの馬の捕まえ方、最初のコネクション、無口や

頭絡のつけ方、刺激に対し驚かせないようにする方法、初めての鞍装着、引き馬でのコントロール、騎乗してのコントロール、そして馬の感情状態など、実に多岐に渡る。

参加した3人のトレーナーはマイクをつけているのだが、今自分が何を考え、何をしようとしているのかを説明しながら調教する。これは見ていて大変勉強になつた。

会場は5000人を収容するインドアアリーナだが、連日満員。特に家族連れが熱心に観ているのが印象深かった。この国には、自分の馬を自分で調教する人がたくさんいるからだ。

たった4日間で障害を飛び 馬の背に立てるほどに!

最終日、今年のTWOOTHの優勝者が決まった。若きトレーナー、ダニエル・ロビンソン (Daniel Robinson) だ。彼は英国のチャンピョンジョッキー、フィリップ・ロ

ビンソンの子息。競馬の都ニューマーケット育ちで、オーストラリアに移住してから幾頭もの競走馬の調教を手がけてきた。

彼の手際は、他の2人の挑戦者に比べて初日から際立っていた。

3日目には早くも騎乗し、ラウンドペンの中を自在に走り回るまでに。この時、あの2人はまだ馬に乗る段階には至っていなかった。

最終日の障害物騎乗では、わずか4日前に馴致を始めた馬とは思えないほどの動きを見せた。しかもロビンソンは最後に、馬の背中に立って見せたのだからすごい。

彼の優勝は、審査員の発表を待つまでもなく明らかだった。満場、スタンディングオベーション。新しいヒーローの誕生である。

馬場馬術や障害の大きな大会ではない、新馬調教コンテストがこれだけ盛り上がり、観客の感動を呼ぶとは。私は大いに感動し、この国の馬文化の深さを改めて思い知った。



鞍をつける。初日から手際のよさを見せていた。



上：騎乗して障害物に挑戦。3日前まで新馬だったとは信じがたい落ち着きぶり。
左：4日目の騎乗、調教。



挑戦者のミッケル・ゴラン。彼の技術も相当なのだろうが、ロビンソンのズバ抜けた手腕には及ばなかったようだ。

WINNER

TWOTH 歴代優勝者

- 2016年：ダニエル・ロビンソン (Daniel Robinson)
- 2014年：ブルース・オーデール (Bruce O'Dell)
- 2012年：ケン・フォークナー (Ken Faulkner)
- 2011年：グレッグ・パウエル (Greg Powell)
- 2010年：アダム・サットン (Adam Sutton)
- 2008年：ダン・ジェームス (Dan James)
- 2005年：ガイ・マクリーン (Guy McLean)





今年注目の新企画!

オーストラリアン・ ブランビー・チャレンジ

AUSTRALIAN BRUMBY CHALLENGE

オーストラリアの野生馬 ブランビーは自由のシンボル

メルボルンがある、ビクトリア州の南部山岳地帯は、映画『The Man from Snowy River』(邦題『スノーリバー 輝く大地の果てに』)の舞台として有名だ。映画にはたくさんの野生馬ブランビーが登場するのだが、その生息地がまさにここ。なんと6000頭もいるらしい。

しかしそのまま放っておくと、頭数が増えすぎて牧草地を荒らすなどの害があるため、政府は400頭程度まで減らす方針を掲げていると言う。

確かにブランビーは何の役に立つわけでもない馬だが、オーストラリアの馬乗りたちにとってブランビーは、“自由のシンボル”。その存在自体にロマンチックな憧れを持つ人々も多いそうだ。

150日間の調教を経て競技へ 最後にはオークションも

「オーストラリアン・ブランビー・チャレンジ」は、ブランビーの保護団体「ビクトリアン・ブランビー協会 (Victorian Brumby Association)」の働きかけにより実現した、2016年初のイベント。“From wild to wonderful”(ワイルドからワンドフルへ)をテーマに、4日間にわたって行なわれた。

まず、全豪から27人のトレーナーを選抜。中にはニュージーランドのトレーナーも含まれており、最年少はなんと14歳。

山で捕らえられたブランビーはくじ引きでランダムにトレーナーに割り振られ、150日間の調教期間が与えられる。

実際の競技は、エクイチーナ開催期間中毎日2時間、屋外アリーナで行なわれた。初日と2日目は、引き馬で決められたパターンを描く競技。3日目は騎乗しての障害物競技。最終4日目は自由な仮装でのデモンストレーション (Freestyle Challenge)。全競技終了後には、オークションを実施。



「ビクトリアン・ブランビー協会」会長コリン・オブライエンさん。
「2年前にこの計画を実施しようとした時には、十分な数のトレーナーが集まりませんでした。今回は募集人数の倍の応募があって、優秀な方を選抜できました。とてもうれしく思います」

もともと人に接触したことのなかった馬たちだ。150日間のトレーニングを受けたとはいえ、課題をうまくこなせない馬も多い。しかしトレーナーたちは、時間をかけてやさしく馬の頸をさすり、励まし続ける。観客からは大きな拍手！

オークションでは1500～4000豪ドルで、多くの馬が競り落とされた。お目当ての馬を手に入れて涙ぐむ少女の姿が印象的だった。



1: フリースタイルの演技、スペイン常歩。 2: フリースタイル・ジャンプ。 3: 最終日のオークション風景。





ダブルダンズ Double Dans

2008 年の TWOTH での優勝以来 (21 ページ参照)、ダン・ジェームスとダン・スティアーズのコンビは“ダブルダンズ”として、その名を世界中で知られるようになった。

ジェームスはアメリカ・ケンタッキーをベースに、スティアーズはオーストラリア・ニューサウスウェールズをベースに、世界中でクリニックとショーを行なっている。

彼らが演じる「リバティーホース・デモンストレーション」は、馬と人のパートナーシップの極致、との評価を得ている。

シャイア、ブレトン、クライスデールといった、体重 1 トンにも及ぶ重種馬の競技とデモンストレーション。

オーストラリアでは開拓当時から、多くの重種馬が活躍してきた。彼らは山から木を運び出し、畑を耕し、荷馬車を引いた。

現在は多くの愛好家によって馬車競技や馬場馬術や障害競技に使われている。



重種馬のショーケース Heavy Horse Showcase

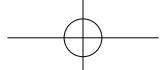


ミニチュアホースの ショーケース Mini-Tana

重種馬の競技が行なわれているアリーナの隣では、ミニチュアホースの競技を開催。巨大な馬に魅せられた人々の横で、ミニチュアホースに情熱をささげる人々がいる。なんと多様な馬文化があるのか、感心するばかりだ。

エクイターナ・オーストラリアと「アメリカン・ミニチュアホース協会 (American Miniature Horse Association)」の共催で行なわれ、ホルター・コンフォメーションクラスとジャンピング・トレインクラスに分かれて技を競った。

競技中、アメリカから来た高名なミニチュアホースのジャッジによるフル解説があり、観客にとっても教育効果の高いセッションだった。



エクイitーナならではの競技をピックアップ！

競技報告

COMPETITION

期間中、トップレベルの障害馬術Show Jumping CSI-Wと馬場馬術CDI-W Grand Prix Dressage Freestyleの競技も行なわれたが、筆者はオーストラリアのエクイitーナならではの競技を中心に観戦した。



馬車競技

Carriage Driving

FEIの公式種目だが、日本で見られない唯一の競技。障害物をくぐり抜ける技とタイムを競う。今回は1頭建レースが行なわれた。



オーストラリアン・ストックホース・チャレンジ

Australian Stock Horse Challenge

オーストラリアの牧場で活躍するストックホースを使った競技で、今回は6チーム、各3人のライダーが参加。ストックウイップ片手にいざ勝負！

マウンテッドゲーム

Mounted Gamms
Australian Championships

ポニークラブでおなじみリレー競技。1チーム5人のライダーが全力疾走するポニーに乗って、旗を取ったり、スポンジを棒で突き刺したりしながらリレーをする。州別対抗で大いに盛り上がる。子どもたちの身のこなしに感嘆！

バレルレース

Equitana Australian
Open Barrel Racing

一定の場所に置いた樽を回ってくるバレルレース。オーストラリアのトップのバレルレーサーが集まり、1万ドルの賞金を懸けてスピードと技を競った。

ザ・エクストリーム・カウボーイ・チャレンジ

The Extreme Cowboy Challenge

今回のエクイitーナで初の実施。「オーストラリアン・エクストリーム・カウガールズ協会 (Australian Extreme Cowgirls Association)」との共催。8人の招待選手がプロとノンプロのディビジョンで参加、スピードに13の障害物を通過する。

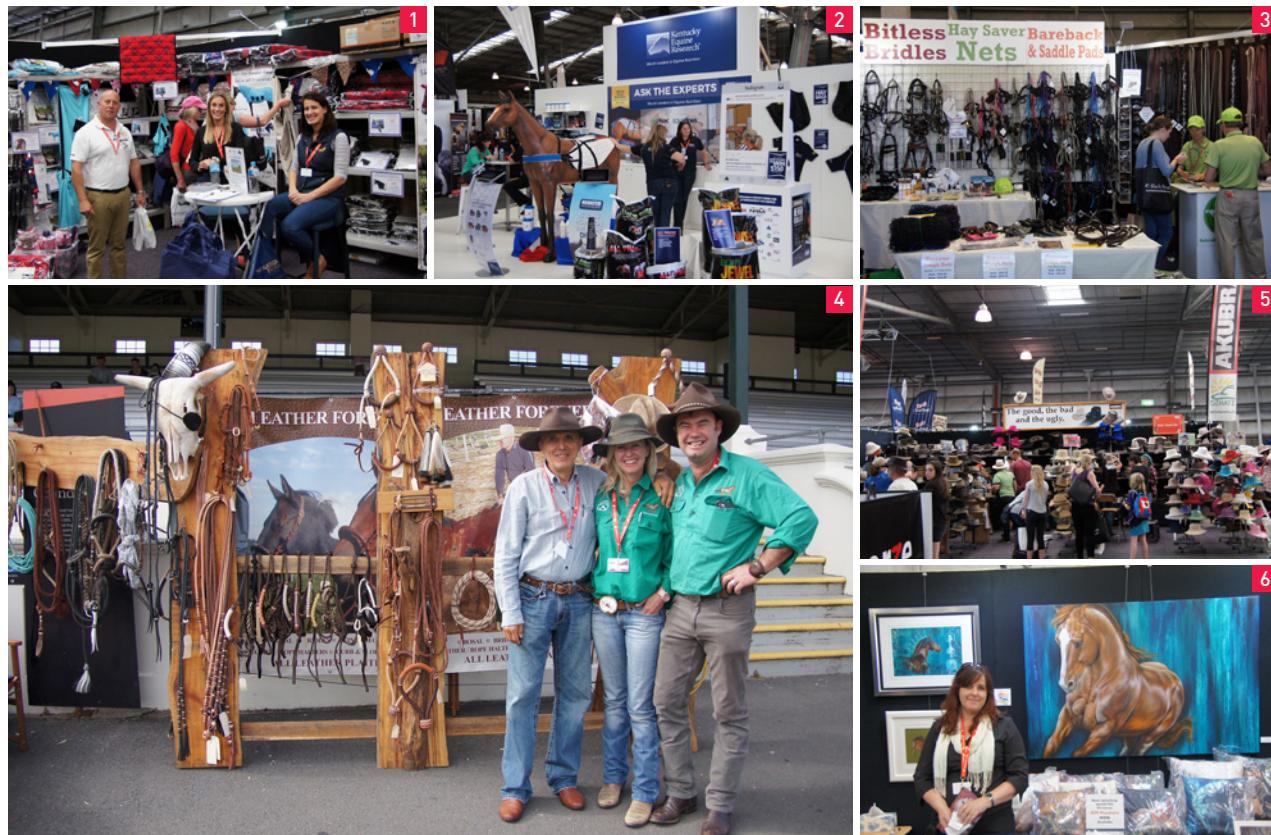


見どころたくさん

展示・店

EXHIBITION

展示パビリオンの中には、300以上の出展者のブースが並んだ。馬具や乗馬ウエアはもちろん、馬の餌、サプリメント、馬の絵、ジュエリー、馬運車や各種牧場備品など実にさまざま。業界人同士の真剣な商談、交渉の場でもあり、一般の馬愛好家の楽しいショッピングの場でもある。何日いても足りない。



1: 馬着メーカー「Snuggy Hoods Ltd」。お腹の下をすっぽりカバーするユニークな馬着と、馬の頸から顔まですっぽり包む暖かいフードのメーカー。英国王室御用達で知られる。筆者の馬たちも、厳冬期の小淵沢で愛用している。 2: 馬の飼料、サプリメントメーカーも多数出展。写真は世界の大手「Kentucky Equine Research」のブース。3: ハミ無し頭絡、裸馬騎乗用パッドなどを扱うお店。 4: 写真左から、自作のレザーワークを売る男性、筆者の友人のジェニーとジェレミー。彼らもやはりAKUBRAをかぶっている。 5: AKUBRA HATのブース。ここの帽子をかぶっていたらオーストラリア人。 6: 自作の絵の前で笑むアーティスト。



田中雅文 (たなかまさふみ)

「海外乗馬ツアーを通じ、世界の馬文化を研究する」フリーダム・ライディング・クラブ (FRC) 代表。1997年にオーストラリアでエンデュランスに出あって以来、自身がライダーとして競技に出てきたわら、日豪両国での講習会の主催など、エンデュランスの普及活動を続けてきた。2005年ドバイ、2008年マレーシア世界選手権で日本チームの監督を務めた。著書に『完走することが勝つこと (正・続)』((社)北海道うまの道ネットワーク協会)がある。現在もフリーダム・ライディング・クラブの海外乗馬ツアー (タスマニアやウェールズなど) を主催し、自らガイドも務める。またアラブ種のエンデュランス馬を使ったエンデュランス合宿・クリニックを通年で開催 (小淵沢・山梨県北杜市)。自ら講師を務めている。

フリーダム・ライディング・クラブ (FRC) からのお知らせ

エクイターナ・オーストラリアはまた2年後、2018年11月にメルボルンで開かれる予定です。見学希望者がいればツアーを組むこともできます。タスマニアでのホーストレッキングと組み合わせることも可能です。ぜひお気軽にお問い合わせください。

[URL] <http://frc-uma.jp/gaiyo>
 [Email] tanakapal@xj8.so-net.ne.jp
 [FAX] 045-543-2624